個が生きる家庭科授業の評価

―第６学年「魚や肉の加工品とじゃがいもを使った調理」―

森　冨　　恵

１．はじめに

生活する力となる知識や技能を習得する機会が現在は，減少してきている。授業で，子どもたちが実際に，手や体を動かしてねらいを追求していくことは，その過程において得られる知識と技能であるからこそ，児童一人一人にしっかり身に付き生活に生きて働く力となる。そのため家庭科では，実践的・体験的な学習の充実が一層求められている。そこで，教育実習生の研究授業で扱った新学習指導要領で追加された魚や肉の加工品の調理を通して，家庭での実践化に結び付く授業について考えてみたい。

２．実践事例　第６学年「魚や肉の加工品とじゃがいもを使った調理」

(1)　題材について

魚や肉は，動物性たんぱく質をとるための食品として，児童の調理の学習に取り入れたい内容であるが，生魚や生肉は鮮度を保つことが難しく，児童には扱いにくいものが多い。じゃがいもは，児童にとってよく食卓にのぼる馴染み深い食品であり，意欲的に取り組める題材である。そこで，本題材では，魚や肉の加工品とじゃがいもを取り上げ，それらを活用した簡単な料理を作ることができるようにすることをねらいとする。

多くの児童は，魚や肉の加工品の種類やそれを活用した料理の種類についてよく知っている。じゃがいも料理についても日常の食事の中でかなり親しんでいる。しかし，自分で実際に調理をした経験は少ない。本題材では，実践的な活動を通して，日常生活に必要な基礎的な知識や技能を習得させ，実際の家庭生活の中で生かそうとする態度を養いたい。

(2)　指導目標

①魚や肉の加工品とじゃがいもの栄養について理解させる。

②魚や肉の加工品の種類や選び方を理解させる。

③魚や肉の加工品とじゃがいもを使った料理を考え，簡単な調理ができるようにさせる。

(3)　指導計画　（９時間）

第一次　魚や肉の加工品　・・・・・・・・・・・　３時間
　・ソーセージの作り方　・・・・・・・・・・・（１時間）
　・種類　・・・・・・・・・・・・・・・・・・（１時間）
　・選び方　・・・・・・・・・・・・・・・・・（１時間）
第二次　じゃがいも　・・・・・・・・・・・・・・　２時間
　・栄養　・・・・・・・・・・・・・・・・・・（１時間）
　・扱い方　・・・・・・・・・・・・・・・・・（１時間）
第三次　調理実習　・・・・・・・・・・・・・・・　３時間
　・実習計画　・・・・・・・・・・・・・・・・（１時間）
　・調理実習　・・・・・・・・・・・・・・・・（２時間）
第四次　まとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・　１時間

(4)　授業設計の焦点

本時は，加工食品の適切な選び方について学習していく。めあてを意欲的に追求し，学習したことが，これからの家庭での実践化に結び付くように，ソーセージの模型を用いて実際に食品を選択

するという具体的な活動の場を設定する。加工食品の選び方としては，特に，賞味期限，食品添加物，保存状態，ＪＡＳマークなどに注目させながら学習活動を進めていくが，自分で主体的に考えて選んでいくという態度を重視して評価していきたい。授業を振り返る場において，感想を記述させ，考え方や態度面に重点をおいた評価ができるようにした。

(5) 指導の実際　(第一次　第３時)

①本時の目標

加工食品の適切な選び方ができるようにする。

②準備

弁当の絵，ソーセージの模型，ＪＡＳマークの図，プリント，資料集，貼付けカード

③評価の観点

関心・意欲・態度	加工食品について関心を持ち，自ら意欲的に学習に取り組むことができる。
創意工夫	ソーセージを選ぶ方法を考えることができる。
技能	品質表示を読み取ることができる。
知識・理解	加工食品の適切な選び方がわかる。

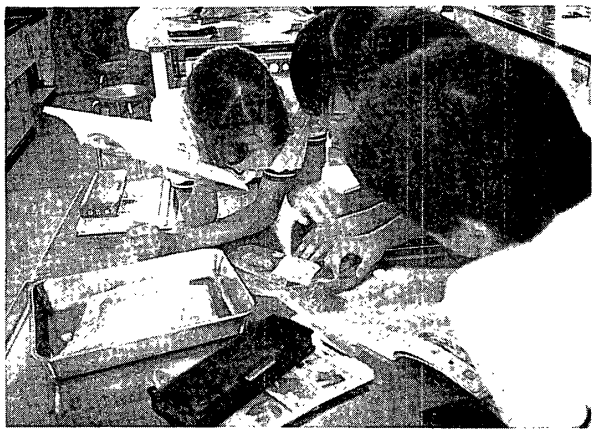
④指導過程

学習活動	指導上の留意点
1 前時の学習を想起する。 2 自分でソーセージの選び方を考える。 製造年月日／添加物／袋の穴／ＪＡＳマーク／価格 3 ソーセージを選ぶ際の観点について発表し，選び方を理解する。 製品に対する信頼 4 学習のまとめをし，次時の予告をする。	1．前時に集めた授業の感想をもとに想起させる。 2．児童に興味を持たせ主体的にめあてをつかませるために，ソーセージを入れれば完成するようなお弁当の絵を見せたあとに「みんなならどのソーセージを買いますか」と発問して５種類の条件の違うソーセージを提示する。 ソーセージはグループごとに同じ条件で活動させたいので，ここではこちらが作ったのを与える。 価格に関してはソーセージを選択する際の非常に大きな要因となりえるが，ここでは品質にとくに注目させたいために条件を統一する。 この他にも量，材料，ソーセージの大きさ等が選ぶ観点として考えられるが，これについては児童からでてきた際に押さえることとする。 3．個人学習のあとに一斉での話し合いに移る。しかし，個人の意見も受容する。 4．本時でわかったことをまとめ，今後加工品を買うときにどこに注目すれば良いかを再確認する。

⑤授業の概要

T　スーパーにソーセージを買いに行きました。そこには，A・B・C・D・Eのソーセージがありました。そこで，皆さんに一緒にどのソーセージにしたら良いか考えてもらいます。一番良いソーセージを選んでプリントに書いて下さい。そして，他のソーセージではなぜいけなかったのか理由を書いて下さい。分からないことがあったら資料集で調べて下さい。

（児童の活動の様子）



C1 酸化防止剤（資料集で食品添加物を調べる）
発色剤・・食品のもとの色を保つ。

C1 これが，いい。

C2 でも，古いよ。

C1 今日何日かいね。

C3 C4 （資料集でＪＡＳマークを調べる）

C3 これだめ。マークがないよ。

C4 （他のマークを調べる）これは，公正取引認証マーク。

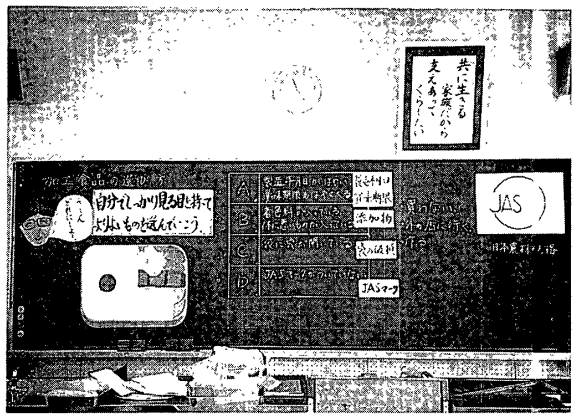
C2 これとこれ全部同じだ。

C4 えー，どこが違うん。（みんなで見比べる）

C1 袋が破れとる。これ。

C2 C3 C4 偉い。

児童が選んだソーセージは，Ａ０人，Ｂ１人，Ｃ０人，Ｄ０人，Ｅ35人であった。選ばなかったソーセージの理由は，次のようにまとめられた。



A　製造年月日が早い。賞味期限も早くくる。
B　着色料が入っている。
C　袋に穴が開いている。
D　ＪＡＳマークが付いていない。

Bを選んだC5 君の意見は，「BにはビタミンCが入っているから果物を食べなくてもビタミンがとれます。アナトー色素というのがいけないのですがアミノ酸やビタミンCなど体にいいものも入っているからBもいいと思います。」というものでした。

C5 Eのようなソーセージを売っているかもしれないんですが，なぜEよりBを使う人の方が多いんですか。

T　良いところに気が付いたね。もしEというソーセージがなかったらみんなはどうしますか。

C　買わない。C　他の店に行く。

C6 作れば良いと思います。C　時間がかかる。

C7 僕は，Aを買います。理由は，前に賞味期限が過ぎているみかんのジュースを飲んだんですがあまり関係なかったからです。

C8 作るのは時間がかかるから，賞味期限が早いといってもその日に食べれば良いんだから僕もAを買います。

C9 ＪＡＳマークが付いてなくて安全じゃないというんですが，売ってるもので死ぬようなものは

ないと思うからDを買います。

C10見た目がきれいだし僕だったらBを買います。

T　こうやってみんなで話し合ったけど，どれが良いかはっきりしませんね。Aを選んだ人は，食品添加物が入っていないことや袋が破れていないことやＪＡＳマークがあることを重視したのですね。B，C，Dを選んだ人もそれぞれ他のことに注目したのですね。みんなが話し合ったのはよりよいものを選ぼうとするための話合いでしたね。これからもみんなが物を買う時には，自分でしっかり見る目を持ってよりよいものを選んでいきましょう。これから物を買う時には，こういうことに注意して買って下さい。

3．実践のまとめ

(1)　ソーセージの模型

ソーセージを選ぶ場面では，紙粘土に色を着け出来るだけ実物に似せた模型を用いた。そのため児童の活動は，授業の概要で載せたように，模型を見比べながら資料集を使い食品添加物や品質表示の意味を積極的に調べていく活動となった。また，いろいろ自分たちで見比べてとても楽しかったです。という子どもの感想もあった。模型を用いたことは，めあてを意欲的に追求させるために有効であったと思われる。模型の素材としては，紙粘土は壊れやすいので，例えば，フェルトにするなど改良していく必要があると思う。

(2)　評価について

C5 君の「実際には着色料の入ったソーセージを使う人が多いのはなぜか」という問いは，本時の「加工食品の選び方ができるようにする」という目標に深くかかわる重要な発言である。そこを授業の中でしっかり認め評価することが出来なかったことが残念である。

「Eのソーセージを除いた場合どうしますか。」という発問に子どもたちから多くの考えが出された。その話合いの評価として，正解というものを挙げず自分でしっかり考えてよりよいものを選んでいくことが大切であるとまとめたことは，製造年月日の古いものや食品添加物の入っているものなどを避けた児童に疑問を残すものになったと思う。

(3)　感想の結果

・家庭生活の中で生かそうとする意欲が感じられる感想・・・48％
・ソーセージを見比べて楽しかったなど授業についての感想・・・24％
・自分は今までどうであったか家庭生活を振り返っている感想・・・10％
・その他・・・18％

児童の感想より本時の学習が，実際の家庭生活にかなり結び付いていたと思われる。家庭での実践につながる可能性がみられる。

4．おわりに

家庭科でねらう学力とは，実践的・体験的な学習を通して日常生活に必要な知識や技能を習得し，それを実際の家庭生活の中で生かそうとする態度としてとらえている。そのような学力の育成には，一人一人が自分や友だちの考え・発想・よさを認め，さらにそれを自分なりに生かそうとすることができる授業づくりが大切である。児童には一人一人にそれぞれの家庭があり，育った環境があり，考え方がある。授業の中の子どもたちの言葉は，そうした様々な背景を持っている。子どもの発言から，着色料の入ったソーセージを使う人が多いのはなぜか。店で売っているものならば全て安全なのか。などの発問を行い，全体で考えを深めていく場が必要であったと思う。